

## 新たな登別にふれる

「『文芸のぼりべつ』の作品一つひとつには、市民の暮らしや思いなどがつまっています。作者の数奇な人生や過酷な体験、一瞬一瞬の思いなどを表した作品は何ものにも代えがたく、それらの作品を多くの人に届けるためにも、『文芸のぼりべつ』を発刊しつづけていきたい」と熱い思いを述べる小林碧水さん。

昭和47年に創刊され、資金難から、一時期、休刊したものの、平成14年、当時の登別市文化協会会長・小林正明さんなどの熱い思いから復刊した『文芸のぼりべつ』は、毎号、創作や自分史、随筆、俳句、川柳、短歌など、幅広い作品を掲載し、現在に至るまで、登別の文芸を牽引してきたといえます。

「市内を舞台にした随筆では、自分も知っている登別の情景が作中に出てくることがあり、自分と異なる視点で描かれた登別の世界を垣間見ることができず。多様な作品を読むことは、新たな関心を生みだし、自分自身の人生をより豊かなものにしてくれるのではないのでしょうか。また、新たな登別を知ることができるかもしれま



▲題字や表紙絵などにも、登別市文化協会会員の思いが詰まっている『文芸のぼりべつ』

せん。『文芸のぼりべつ』は、市役所売店などで購入することができます。文化協会では、発刊に賛同いただける会員を募集しており、会員になられた方に本を贈呈しています。ぜひ、登別市民の皆さんに読んでもらいたいですね」と小林さんは思いを語ります。

## 文芸の輪を広げたい

寄稿者の多くは、高齢化しており、年々、作品数も減少傾向にあるという小林さん。

「筆を執るとき、人は自分自身を見つめ直すことになると思いますが、見つめ直すことで、自身の新たな発見をすることができ、より成長することができるのではないのでしょうか。寄稿者は、長年、創作活動に取り組んでいる方ばかりではありません。ぜひ一度、作品を寄稿してみませんか」と次号の発刊に向けて多くの方からの寄稿を呼びかけています。



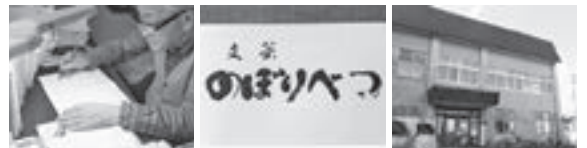
KIRARI

こばやし へき すい  
**小林 碧水**さん(登別東町)

平成30年7月31日(火)、創刊から37号を数えた『文芸のぼりべつ』が発刊されました。登別市文化協会・文芸部が発行する文芸誌『文芸のぼりべつ』は市民や市にゆかりのある方から寄稿された数多くの作品が詰まった一冊です。

今号では、編集委員長である小林碧水さんに『文芸のぼりべつ』への思いを伺いました。

## 市民の思いをすくう『文芸のぼりべつ』を支える



昭和17年、白老町生まれ。76歳。

昭和57年、結婚を機に登別市へ移り住み、川柳の創作を続ける傍ら、川柳の楽しさを多くの人に伝えたいと句会などを開催し、精力的に活動している登別市文化協会所属・登別川柳社の主幹(代表)。平成14年から現在に至るまで、『文芸のぼりべつ』の編集委員長として、発刊に尽力。